

第四回 こののはじまり(四)

その土地には最初の春から、夏、秋と何度か冒険侵入したことになるのだが、その間、話を持ちかけた夫妻が離れとして使っていた小さな建物をゲストハウスとして使わせてくれたのも良かった。あいかわらずひどい湿地なのだが、季節毎に表情をどんどん変えていく姿をじっくり観察することができたのは新鮮であった。いつの間にか訪れるのが楽しみになり、秋には、まだ名前も知らない草花を両手いっぱい摘み取り、大きな花瓶に差している自分に驚いた。

私より冷静な判断ができる妻も、どうも気持ちが傾いて来たようで、土地を見に行くだけでなくS市の植物園のなかにある湿地園と一緒に見に行ったりして、湿原を楽しむシミュレーションをするようになってしまった。

私としてはそのころ、たまたま仕事で伺った小さな村や町で、大変だけれど楽しく誇りを持って暮らしている方々にたくさんお会いすることがあったのも背中を押すことになったのかもしれない。

T村を訪ねた時の話も忘れられない。酒席で副村長から「まちなかの便利なところに移住促進住宅の分譲をはじめたが今一つでどうしたものか。」と投げかけられた。酒の勢いもあって「村の良さに惹かれて住もうとする人は、まちなかの便利などなど求めていないと思う。もつと自然に囲まれた・・・」と決めつけてしまった。そうしたら副村長「それなら石塚さん、二万坪の土地があるけど買わないかい。川も流れているよ。」と返してこられた。「そんなお金は・・・」と尻込みすると、「二万坪、二千万円でどう。」と畳み掛けられた。清水の舞台から飛び降りるつもりで有り金叩けばまったく手が出ない額ではないのにびびくりした。もちろん買いはしなかったが。

隣人の隣人、つまり話を持って来たご主人の妹夫婦だが、その存在も大きかった。何度か会ううちにとても人柄の良いお二人で気に入っていたのだが、ある時、ご主人が「川で鮎を釣って来たので、一緒に食べませんか。」と声をかけてくれた。鮎は香魚とも書くが、天然の鮎はひと噛みすると香りが口から鼻へといっぱいに広がり、思わずため息が出る美味しさだった。妻と「この土地を手に入れると、毎年、鮎を食べることができるとかな。」と頷きあったのが思い出される。

価格交渉をしたら一千万円を切るまでになったが、決して安い買い物ではない。それも野遊びのために。

だが、ほどなく購入することを決めてしまった。今から思えば、なぜ、こんな荒地を買うなどという決断をしたのか不思議である。が、そういうことになってしまったのだ。いろいろ決断の理由をあげてみたが、どれも決定打と言えるものはない。将来の暮らしを冷静に比較検討した結果とか理詰めの判断ではなかったのは確実だ。きつと、私たちの心をぐつと捉えて離さない何かがあったのだろう。

この決断が重要な意味を持っていたことを気づくのはもう少し先になるのだが、その話はのちほど。

